

2026

4

令和8年4月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻392号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあ言おう



サワヤカ



公益財団法人
さわやか福祉財団

さわやか福祉財団



2026年度 全国交流フォーラム 開催のお知らせ

2026年7月13日(月)

当財団の「新しいふれあい社会づくり」をご支援いただいている皆様と一堂に会し、幅広い情報交換と交流を目的とした今年度の全国交流フォーラムを開催いたします。



(写真は昨年の全国交流フォーラムの様子)

概要

- 第1部 さわやかフォーラム** 事業報告、トーク等
第2部 さわやか交流会 交流パーティー

場所

東京ガーデンパレス

(東京都文京区 / JR・地下鉄「御茶ノ水」駅等最寄り)

参加費

- 第1部：無料**
第2部：運営協力金として2,000円 (当日受付にて)

- 詳細は決まり次第、財団ホームページに掲載いたします。
- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆様には、別途案内状を郵送いたしますので、お申し込みはそちらをご利用ください。

お問合せ 電話 (03) 5470-7751 (担当：中村)

皆様のご参加をお待ちしています!

とあ言おう

2026年4月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

成功か失敗かではなく、成功か学びか 助け合い活動の捉え方

清水 肇子

4 | 生き方・自分流 |

強く、優しく、くじけず

家族同然に若者を支え続ける

NPO法人四つ葉のクローバー 理事長 杉山 真智子さん（滋賀県守山市）

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

できることからステップを踏んで 着実に進む地域のふれあい・助け合い

公平地区たすけあい協議会（千葉県東金市）

20 シリーズ 定年、その先へ —地域とのつながり方— 最終回

企業から福祉への 人材供給プロジェクトの取組紹介

一般社団法人定年後研究所 池口 武志

新しいふれあい社会づくりに向けて

16 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介 / 状況のご報告

24 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

25 NEWS & にゅーす

29 活動日記（抄）

② <コラム> 波佐見町が
佐賀市「たすキュー金立」を視察

④ みんなの広場 / 投稿募集

⑤ 「いきがい・助け合い
オンラインフェスタ2026」のご案内

教えてほしいと言われるが、実はこれは助け合いの場合、案外難しい。他事例に学んで着実に成果につなげたいという真剣さや熱意はわかるのだが、失敗例を知っただけでは、助け合いの推進はうまくいかない。もちろん進める上で、してはいけないという大前提はある。

「一番の失敗例は何もしないことです」「行政が計画・指示して、住民が自分たちで考える機会がないことです」。時折講演でこう話すと、頷く人もいるが、もっとすぐ役立つ方策を教えてほしいといった表情が窺えることがある。気持ちはわかるのだが、助け合いの推進は自分事として考えることが何よりも不可欠で、そこでは一直線に進まないことも当たり前。そもそも助け合い活動を進める上での成功と失敗とは何だろう。物事の成功か失敗かを考えるとき、対象や期間など何を前提にするかによって当然に判断が大きく変わる。地域で自分たちで考え、取り組んできたことはすぐに成果として見えなくても必ずその地域の財産になる。行政が考えたとおりに進まないことだけでただ失敗と捉えるのではなく、次につなげる学びがあるということ、そうした進め方自体に意味があるということをぜひ理解しておいてほしい。

逆に好事例の横展開もよく言われるが、行政関係者がそのまま地域に採り入れようとしても失敗する。情報として伝え、住民の皆さんが自分事として咀嚼して初めてその手法は生きたお手本になる。他団体の活動の現場視察を勧めているのも、訪問した相手の熱意や率直な課題に直接触れることで、自分たちで考えることの意味や価値を直接学ぶ機会になるからだ。

生活支援の体制づくりが喫緊の課題である中、制度サービスだけではおおよそ足りず、住民の互助による生活支援をしっかりと包括的な支援ネットワークに組み込んでいかなければ、超高齢化がますます進むこれからの社会を支え切れない。助け合いによる生活支援の必要性和価値、その取り組み方を今年度も当財団としてしっかりと伝えていきたい。

方・流
生・分
自・分

強く、優しく、くじけず

家族同然に若者を支え続ける

NPO法人四つ葉のクローバー 理事長

杉山 真智子さん (滋賀県守山市)

偶然にも思える出来事をきっかけに、児童養護施設に暮らす子どもたちのその後の人生を支える杉山真智子さん（66歳）。「今がどんなにつらくても、自分の人生を自分の力で切り開いてほしい」という言葉に込められた杉山さんの思いを取材しました。

(取材・文／神保 康子)



杉山真智子さん。シェアハウス「夢コート」の前で

児童養護施設のことか頭の片隅に

杉山真智子さんは守山市出身。3人きょうだいの真ん中で育った。飛行機の客室乗務員に憧れ、短大の英文科を卒業。メーカーの総務部で英語を使う仕事に就いた後、24歳で結婚し、3人の子どもを産み育てる主婦となった。

あるとき、小学1年生だった長男が学校で友だちとの間にいざこざがあり、「その子のおうちに謝りにいこう」と2人で出かけていった。するとそこは児童養



30代の頃の杉山さんと、3人の子どもたち。
次女と長男は現在、四つ葉のクローバーの職員として杉山さんと一緒に活動している

護施設で、事情があり家庭で暮らすことができない子どもたちが共同生活をしていた。

「こういうところがあるんだ」

驚くと同時に「いつかこういうところでボランティアをしたい」と思ったという。

「いつか」というのは、当時はそれどころではない状況だったからだ。朝から深夜まで仕事を3つかけ持ちし、「ガリガリにやせたので、友人から『病気になるたかと思った』と言われました」。それくらい大変な時期だった。

ことの発端は、夫が継いでいた老舗家業の倒産だった。夫は不動産会社に勤め一家を支えることになったが、時はバブル景気真ただ中。やがて夫は、華やかな世界に取り込まれてしまう。空前の好景気が終焉を迎えても、浪費をやめられなかったという。

「このままではダメだ」と、杉山さんは夫と夫の両親、3人の子どもと一緒に、再起を目指す自身の故郷・守山市に戻ってきた。しかし夫は結局立ち直れないまま。杉山さんは、自身と子どもの自立に向け、かけ持ちで仕事を始めた。

家族はバラバラだった。当時高校生になったばかりの長女に「お母さん、笑わなくなった」と言われ、杉山さんは「このままでは子どもに気を遣わせるばかりだ」と離婚を決意。40歳のときだった。3人の子どもとアパートで暮らしながら必死に朝昼晩働き続け、末っ子の長男が高校を卒業して社会人になったところで仕事を1つ辞め、ずっと頭の片隅にあった児童養護施設でのボランティアを始めることにした。

「大きな家を用意して待ってる」

児童養護施設では、保育園から小学校低学年の子たちの遊び相手をしたり、宿題を見たりした。「その4年半の間に会った子たちが私の人生を変えてくれた」と杉山さんは振り返る。

さまざまな事情があり家庭で暮らすのが難しい子どもたち。「事情」とは、ネグレクトを含む虐待であることが多い。両親の離婚後、引き取られたほうの親から暴力を受けていた子の話を聞いた別の子が、「ぶたれるだけならそのとき我慢すればええやん。ご飯がないのは本当に精神やられるで。食事があるだけマシやん」と言う。するとまた別の子が「僕は2歳からこの

施設に来ていて、お父さんもお母さんも知らない。ご飯食べられなくても、ぶたれてもいいから、お母さんに会いたい」と話す。

今まで知らなかった現実に驚愕しつつ、杉山さんは子どもたちの優しさに触れることになる。

「傷ついているからこそ優しさってあるんです」

自分たちのおやつの時間におばちゃん（杉山さん）の分がないと先生に抗議する子、「幸せになれるで」と施設の運動場で見つけた四つ葉のクローバーをくれる子、新しく入ってきた年下の子の面倒を見る子――。

一人ひとりの優しさが身に沁みだ。

精一杯向き合ううちに「おばちゃんの家泊まりにいききたい」という子も出てきた。お泊まりを受け入れるために杉山さんは里親の資格を取り、週末や学校の長期休暇に子どもを自宅に招くようになった。

保育園の年中さんの男の子が泊まりにきた日のこと。好物だというハンバーグを作って一緒に食べ、お風呂に入って布団に入り、本を読み聞かせたり、お話を聞かせてもらったり、楽しく過ごしていた。すると急に静かになった。「さっきまでえらいしゃべってたのに、もう寝たんかな」と布団をそっとめくってみると、そ

の子は声を殺して泣いていた。

「『どうしたん?!』って聞いたら、『なんでおばちゃん僕を産まへんかったんや』って。『僕、おばちゃんから生まれたかった』ってお腹を叩くんです。『ごめん、おばちゃんが産んであげられなくて』と一緒に泣きながら寝ました」

そんな子たちが順番に泊まりにくるうちに、杉山さんはみんなにこう約束していた。「みんなが大きくなったら、一緒に住める大きな家を用意しておばちゃん待ってるからね。それまで先生の言うことをよく聞いてね」

自分たちで頑張ったら応援が

周囲に「大きな家」をつくるという夢を話すうちに、賛同者が現れた。その人は「自分も地域にずっとお世話になってきたけれど、どう社会貢献したらいいか分からなかった。ぜひ協力させてほしい」と言い、杉山さんが見つけた物件を購入するために、借金の保証人になってくれた。

ローンを組んで中古ビルを購入し、改装してシェアハウスとしてオープンしたのが2013年。「夢コー

ト」と名付けたそ

の場所は、4階建てで個室が10部屋あり、みんなが集えるリビング兼キッチンもある。各部屋のベッドや家具家電等は、独立行政法人の助成で購入した。

「徹夜で書類を書いて助成に応募しました」と杉山さん。

声を殺して泣いていた年中さんの子は、その後自立できる力をつけ、夢コートに住むことはなかったが、児童養護施設を出てからすぐの自立が難しい若者らを受け入れていった。

運営母体は、杉山さんが設立した「NPO法人四つ葉のクローバー」。初期の中心メンバーは杉山さんと経理担当者と保育士の3人だけ。入居者からの家賃収入はあるものの維持費には足りない。入居者の就労支援も兼ねて、1階で餃子屋を始めた。しかし思うよう



杉山さんが施設を出た若者たちのために初めて用意した“大きな家”夢コート

には売れず、「餃子買ってください」「この子を雇ってやってください」と地域をまわり、ある経営者に「この不景気に、うちを潰す気か」とまで言われたそ
うだ。

「何くそ、とと思って（笑）。もう、『お金ください』『買ってください』と言うのを一切やめました」

腹をくくった杉山さんに、やがて道が開かれる。

徐々に舞い込み始めた講演依頼に応えていた14年頃。当時夢コートに住んでいた若者たちが「講演は俺らがしゃべったほうがええやろ」と、壇上で自らの経験をお話してくれるようになった。これが今は、シェアハウスの卒業生や入居者が「語りと音楽」で想いを発信する「CLOVER DREAM LIVE」という大切なイベントに発展している。当事者の発信がもたらす影響力は、支援者のそれとは比較にならない。「DREAM LIVEは本当にいろいろな方が来てくださって、若者たちの思いに共感していただいて、ありがたいことにご寄付が集まるようになりました」と杉山さん。

ちょうど、世間では成人年齢18歳への引き下げの議論がされていた頃。「政治家の方々が社会的養護に関

心を持ち始めて、ほぼ全部の政党が視察に来はりました」

やがて政治家から「こんな大事な仕事を民間でさせるとは何事や」と県に掛け合ってくれ、16年に夢コートは県の「自立援助ホーム」としての認可を受けた。

「お金ください、助けてくださいって言うのをやめて、自分たちで頑張ろうってパワーを出したら、応援は向こうからやって来るもんなんや、つて学びました」



今年2月に行われた「CLOVER DREAM LIVE 2026」の様子

四つ葉のクローバーの活動は広がり、現在は、夢コ



夢コートでの杉山さん

ート以外に2つのシェアハウスと、居場所であり学びと集いの場でもある「マザーボード」を運営する。杉山さんの活動への情熱はどこから来るのか。

「よく『立派ですね』とか『優しいですね』と言っていただきますが、ただ目の前の子どもたちを放っておけなかった。それだけです」

厳格な家庭に生まれ、厳しすぎる父に従う母が気の毒だった。「いい子でいなければ、家の中を明るくしなければ」と振る舞う子ども時代だった、と振り返る杉山さん。

「これまでいろいろなことがあって、私にとっては『家族』というものがめちゃくちゃ大事で。そういう私が、社会的養護が必要な子たちに行き届けることができることって何だろうと、そう考えて活動することが私にとっての幸



夢コートに暮らしていても、仕事や学校がありなかなか一堂に会すことのない若者たち。月1回開催している「真夜中会議」では、食事をしながらテーマを決めて語り合う

せです。だから、『こちらこそありがとう』なんです」
そして、こう言ってチャイミングな笑顔を見せた。
「私が死ぬ間に、みんなが集まってくれるような人
生だったらうれしい。それが願いかな」



できることからステップを踏んで 着実に進む地域のふれあい・助け合い

公平地区たすけあい協議会（千葉県東金市）

千葉県の中東部に位置する東金市は人口約5万6000人、高齢化率32%ほど。首都圏とはいえ、クルマ中心の生活です。高齢化による深刻な課題に対し、2019年から第2層協議体が市内各地区に順次立ち上がり、住民の活動が始まっています。公平地区でも、第2層協議体「公平地区たすけあい協議会」（以下、協議会）が住民のニーズを調査し、「困ったときはおたがいさま」を合言葉に、できることから地道な取り組みを進めています。

（取材・文／石橋 千春）

商業施設や病院のあるJR東金駅周辺
の市街地から車で10分ほど走れば、
まわりはのどかな田園風景。そんな中

にある公平地区コミュニティセンター
で、協議会のメンバーであり、有償ボ
ランティアによる生活支援グループ

「公平ゆうあいサポート」のライフサ
ポーターでもある川野京子さん（70歳）
と待ち合わせた。川野さん担当の地域
に住む花岡勝男さん（95歳）宅のごみ
出し支援に同行させてもらうためだ。

ごみ出しのお手伝いで
近所さんの仲に



川野さんと車で花岡さん宅にうかが
うと、戸建ての1階の窓から花岡さん
が顔をのぞかせ、川野さんの来訪を待

ちわびていた。川野さんが「こんにちは！」と明るく声をかけると、玄関にまわった花岡さんがニコニコと笑いながらドアを開け、私たちを招き入れてくれた。

川野さんが花岡さん宅にごみを取りに行くのは朝9時頃。「花岡さんには、玄関の外に出しておいてくださいねとお話していますが、毎回、玄関まで出てきてお礼を言ってくださるんですよ」。寒い日はこたつのある部屋で川野さんが来るのをいつも待っていてくれるという。「窓からのぞく花岡さんの顔を思うとね、いつまでもこのお手伝いを続けていきたいなーと思うんです」とつぶやく川野さんの言葉に、こちらも心がほんのり温まる。

花岡さんは妻の明子さん（92歳）と2人暮らし。川野さんにごみ出しの依頼があったのは昨年7月のことだ。それまでは、歩いて10分弱のごみ集積所



談笑する花岡さん（左）と川野さん（右）

まで何度も休みながら運んでいたという。「でも最近、足腰がめっきり弱ってね」と花岡さん。当時、民生委員をしていた川野さんが訪問した折に、会報誌『公平たすけあいだより』で知った公平ゆうあいサポートによるごみ出

し支援のことをたずねた。

「川野さんは真摯にやってくれるから頼みやすい」と花岡さん。以前から面識があった2人だが、この活動を通して頼りがいのある「近所さん」になったという。

最初は「外圧」に感じたけれど…

東金市の第1層協議体が「東金市介護予防・生活支援サービス協議体」という名称で設置されたのは2016年。「考えよう、話し合おう、育てよう支え合いのちい木」をスローガンに市全域の地域課題が協議されてきた。同市12地区の中で現在、第2層協議体があるのは6地区で、人口約4900人の公平地区に第2層協議体「公平地区たすけあい協議会」が設立されたのは20年のこと。前年に市社会福祉協議会所属のSCからの声かけで、地区社協



「公平地区たすけあい協議会」理事会の皆さん

（地区振興協議会、区長会、民生児童委員、長寿会、ボランティア団体等）を母体に社会福祉法人も含め、37人が集まった。第1層S.Cの野口嘉信さんは「公平地区は高齢化率40%弱と他地

区より高めたことや、地区社協が各種団体で構成されているので、地域課題について話し合いやすいのではな

ありましたし、わが身を振り返ると、自分の暮らし方・生き方に関わることだと思いました」

いかと思いました」と話す。

土屋さんには、近所に99歳で亡くなったおひとりさまがいた。頭は明晰で、用があるたびに昼夜を問わず電話で呼び出された。土屋さんは、亡くなるまでの3年間に本人からの「熱が出た」「病院に連れて行って」「クリーニングを取りにいった」等々のお願いに数百回対応してきたという。おたがいさま精神の持ち主でもある。話し合いを重ねるうちに、これからは地域のみんなで支え合う組織づくりが必要不可欠と受け止めるようになったという。

協議会の中で話し合いの核となる理事会の14人は年6回ほど会合を持ち、さらにその中の専門部会8人が必要に応じて会合を開いている。会合には、第1層・第2層S.Cが毎回参加して課題の共有や活動の後方支援を行い、他地区と共通する課題は第1層に上げている。

現在、協議会の会長を務める土屋清文さん（75歳）は設立前後をこう振り返る。

住民の声を大事にできることから段階的に

「私個人の感想ですが、最初にS.Cさんから話を聞いたときは、いわば、お上からの外圧でしただね（笑）。でも、自分がおひとりさまになったときの不安は

公平地区社協会長の浪方日出男さん（78歳）は「助け合いといっても、具体的にどうしたらいいかわからない。

まずSCさんに全国の事例など情報を集めてもらったり、市内の他地区で先行して行われている生活支援活動についての勉強会を実施してもらいました。でも、一番大事なのは公平地区の高齢者がどう感じているか」と語る。

そこで協議会は、地区内の70歳以上の住民にアンケート調査を行い、理事会で検討した。主な項目は「困っていること」「将来困りそうなこと」「お手伝いに参加できることはあるか」

等々。配布総数1430部、回答率は約35%。困り事（庭木の手入れ・草取り、避難誘導、外出・移動など）は想定内だったが、何より結果から見えてきたのは、住民が自分のまちにどんな利用可能な資源があるか知らない、情報が足りていないということだった。

これらの地域課題を解決すべく「情報の発信・取得」等について協議を重ね、21年から会報誌『公平たすけあい

だより』を随時発行。現在15号まで配布し、イベントや助け合い活動について情報発信している。また、23年には高齢世代のために『公平地区暮らしの便利帳』も作成して全戸配布。参加できる活動や生活に必要な情報、相談窓口などを網羅した。これらはすべて専門部会で編集している。

また、今や生活の情報入手に欠かせないスマホについても、操作方法が分からない高齢者のために「スマホ教室 in 城西国際大学」を23年から城西国際大学の千葉東金キャンパスで開催することになった。これは、同大学を卒業した野口さんが旧知の准教授に相談して実現したものだ。

「学生さんたちが1対1で教えてくれて助かります。わざわざ使い方テキストまで作成してくれたんですよ」と参加者も協議会メンバーも大喜び。スマ



「スマホ教室 in 城西国際大学」の様子。
昼食は大学生と学食ランチで交流した

ホを通じた詐欺への対策など行き届いた内容が大好評で、毎年開催されリピーターも多い。

土屋会長は「私たちの活動は、介護予防・生活支援・社会参加の3つの視点で展開していますが、すぐに生活支援を立ち上げるのは難しいと感じて、



生活支援のごみ出しの様子



理事会には地元の社会福祉法人も参加しており、デイサービスの車を使用した「お出かけ支援サービス」も3か月に1回実施。住民が空の駅などに外かけて食事や買い物を楽しむ

今ある社会資源を利用してできることから始めました」と話す。

同じ年に始めた「各種団体体験会」

もその一つ。高齢者が地域の活動を知り、社会参加するきっかけにしようという趣旨だ。地区内の長寿会やボランティア団体に働きかけて、さまざまな団体に体験会を設けてもらったところ、通年で体験会を開く団体も出

てきて住民同士の交流が活性化しているという。

「走りながら考える」と話す土屋会長

の言葉通り、できることから活動を始めて実績を重ね、当初からの計画通り24年10月に有償ボランティア団体「公平ゆうあいサポート」を立ち上げた。原則70歳以上が対象で、ちよっとした困り事のお手伝いをする。会報誌でサ

ービス内容を告知し、利用ガイドブックを配布。事務サポーターやライフサポーターも募集した。現在ライフサポーターは32人で、8人が事務サポーターを兼任、60〜70代を中心に40代も1人いる。

目下の課題は、活動を周知してますます利用してもらうことだ。そのため協議会で話し合い、地区の各団体の

仲間が増えると面白くなっていく

集まりで出前説明会を開くことにした。「まず話し合う、そして仲間を増やしていくことが大事。なかには『よくやってくれたね!』と感謝してくれる人たちもいて励まされます」と土屋会長。



東金市のSC、野口さん(左)と鈴木さん(右)

協議会に伴走してきた第2層SCの鈴木貴子さんは「メンバーの皆さんは一歩一歩着実に形にしてこられました。実際、私も利用者やサポーターさんの笑顔や感謝の言葉に触れる機会があり

ますが、福祉のプロではなく住民の方々がそれを生み出しているのがすごい!」。それを地区内や市全体に発信していくのもSCの役目、とも。第1層SCの野口さんも「公平地区は協議会ができてから活性化していると感じますし、皆さんの気持ちも一つになってきています」と話す。

土屋会長は「うちはメンバーに恵まれています。SCさんは後方支援と言うけれど、私たちにとっては水先案内人でもある。これからは、生活支援内容とともに、『これが得意!』というライフサポーターも増やしていきたい」と今後について語ってくれた。

住民同士の困り事解決の活動は、始まってまだ1年。だが「同じ意識を共有できる仲間が増えると、世の中が面白くなっていく」と話す土屋会長とメンバーたちの歩みは着実に前に進んでいる。

公平地区たすけあい協議会

「困ったときはおたがいさま」をキーワードに地区社協を母体とし、助け合いの3本の柱(介護予防・生活支援・社会参加)を中心に活動している。

■生活支援「公平ゆうあいサポート」

担当区ごとの事務サポーター(2人以上の体制)が利用者との連絡・調整を行い、担当区のライフサポーターが利用者の支援を行う。

<日常の困り事> ごみ出し、庭木の手入れ・草取り、話し相手・見守り等

<謝金> 30分ごとに250円、ごみ出し500円(1か月何回でも)。

自治会未加入の場合は別途300円。チケット制

<受付・提供時間> 原則2週間前まで(4~9月:9~17時、10~3月:9~16時)。ゴールデンウィーク・年末年始休み

●連絡先/社会福祉法人東金市社会福祉協議会 電話 0475-52-5198

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、集いの畑、子どもと地域のための野外活動、住民主体の移動支援をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

岩手県宮古市

畑作業を通じた多世代交流 見守り合い安心して暮らせる町に

みんなのはたけの会

助成金額 6万1000円

「みんなのはたけの会」は、東日本大震災で大きな被害を受けた地域で2023年に発足しました。震災後の人口減

少や高齢化、コロナ禍で住民同士の交流がますます減少する中、家から出て畑に住民が集まり、笑顔で話し合える居場所づくりとすることを目標に活動してきました。春には小学生とともにジャガイモを植え、夏に収穫し、続けてダイコンを



みんなのはたけの会の皆さん

育てます。収穫した野菜は子ども食堂や保育施設、介護施設、一人暮らしの住民などに配布し、大変喜ばれています。今回の助成金では、肥料や野菜の種、畑に立てている看板のペンキ塗り替えの道具等を購入されました。

作業後の交流会では小学生との世代間交流が皆さんの会話に彩を添えてくれます。2025年度はメンバーの声かけで、かつて同じ地域に住んでいたが転居した人や、隣の地区の高校生なども参加したそうです。

今後は、新たに保育園児とのサツマイモの苗植えや収穫体験なども予定しており、認知症や障がいのある方、子育て世代など、より多くの人が関われる場にしたいと考えているということです。

「一人一人のちよつとずつのちらら」を合わせ、お互いが気遣い見守り合いながら、共に安心して暮らせる町づくりを進めていきたい、と報告をいただきました。



みのっ子村でいきいきと遊ぶ子どもたち

岐阜県美濃市 子どもの「やってみたい」を応援し 地域のつながりも育む野外活動

みのっぶ

助成金額 15万円

「みのっぶ」は2020年設立。小学生向け自然教室「ふもとっ子クラブ」を開催してきました。その経験と地域のつながりを生かし、美濃市内のNPO法人・団体と連携して、多世代が集う居場所「みのっ子村」を開始しました。子どもたちの遊びや学びの場の不足、子育て世代の孤立や地域交流の減少といった課題を背景に、子ども・保護者・地域住民が関わる野外型の居場所づくりを目指しています。

活動は月2回程度、小学生だけでなく幼児から高校生まで参加でき、子どもたちの「やってみたい」を大人が応援

援する場所、不登校の子が気軽に立ち寄れる場所としても周知していきたいということです。

今回の助成金は、備品購入、チラシ印刷、保険料等に活用されました。

この取り組みに、食品会社や住民による食材提供、地元高校生のボランティアや広報協力、保護者の運営支援、大工さんによる資材提供など、

地域のさまざまな支援も集まりました。子どもと大人が自然の中で遊びや食事作りを楽ししみ、地域で声をかけ合える関係が生まれつつあるそうです。今後は市社会福祉協議会などとも連携していきたいというみのつぶ。「地域で支え合う関係性を育む活動」「顔の見えるつながりづくり」に少しずつ寄与できていると感じます、と報告をいただきました。



チーム上弓削による移動支援の様子

京都市京都市

住民主体の移動支援

PR効果で利用増、他地区からも注目

支えあいボランティア「チーム上弓削」

助成金額 15万円

京都市右京区京北地区は、市街地から遠く森林が多い地域で、高齢化率が50%に迫っている状況にあります。公共交通機関の縮小やタクシー会社の廃業等で、免許返納後の通院や買い物に困難を抱える住民が増加していました。そうした状況下で「チーム上弓削」は2024年、講習を受講したボランティアがマイカーで行う外出支援を開始しました。

今回の助成金は、移動支援のための自動車保険料、車両に貼るチーム名のマグネットシート作成、体温計やアルコールチェッカー購入に活用されました。

地域住民への一定の周知を行って活動をスタートしましたが、当初は思ったほど利用が伸び

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域で困り事を抱え、孤立する人たちが全国で増え続けています。引き続き、本基金を通じた皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(3月15日) 当財団ホームページ開示時点	
◎寄付受付額	437件 2億2259万2637円
このうち遺贈基金より1億8000万円を供出	
◎助成実行額	1406件 2億1244万4749円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

- 基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金 電話：(080) 9277-4174
担当 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

なかつたため、高齢者が集まる場で寸劇による説明を行ったところ大好評だったということです。マグネットシートでのPR等もあり徐々に利用者は増加、市内の他地区からも活動への関心が寄せられるようになりました。
買い物での相乗りでは、利用者同士が車中や買い物先で

の会話を楽しむといった付帯的な効果も生まれているというチーム上弓削の移動支援活動。今後は担い手を増やし、利用者のニーズを踏まえて取り組みの拡大を検討していきたい、と前向きな報告をいただきました。

定年、
その先へ

地域とのつながり方

〈最終回〉

企業から福祉への
人材供給プロジェクトの取組紹介

一般社団法人定年後研究所所長

池口 武志



（いけぐち たけし）1986年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。2021年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学院老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討委員会、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

縁あって、「企業から福祉への人材供給プロジェクト」¹⁾に関わらせていただいております。

民間企業や公共団体等で長年仕事をしてきた会社員は、これまでの延長でセカンドキャリアを想像しがちで、福祉への転職の声掛けをすると、「資格」「経歴」がないととても無理だと決めつける方が大半です。また、一方で社会福祉法人の経営者や人事担当者の視点からも「企業で働いてきた人を雇うのは不安だ」「ましてや管理職で活躍してきた人たちは、福祉の現場に来てくれるはずがない」と、はな

から中高年の会社員を採用対象から外しがちです。私たちの「プロジェクト」では、このような思い込み、アンコンシャスバイアスを打破すべく、数年前から、企業等から福祉の仕事へ転職した方や、そうした転職者を雇った福祉事業所へのインタビューを重ねてきました。この連載でも、大手企業から地域包括支援センターや障がい者支援施設へ定年前に転職された方の声を紹介してきました。いずれもご利用者からの感謝の声が大きくなり、繋がりつつあること、企業でのマネジメント経験、営業経験

1) 「企業から福祉への人材供給プロジェクト」に関するお問合せは、定年後研究所のサイト「問合せ」からお願いいたします。 <https://www.teinengo-lab.or.jp/>

が福祉の仕事に役立っていることを率直に語って
れました。福祉法人の側からも、「企業で培ってこ
られたビジネスマナーは、即戦力であるばかりか、
職員のお手本になるレベル」「人の立場になって考
えることが必要な職業なので、採用基準はざぱり人
間性。今では新卒よりもシニアの中途採用が多くな
った」との声に接してきました。

このような声を、企業や福祉事業所の方にお届け
するフォーラムも定期開催しており、去る2月28
日は、横浜市社会福祉センターで、転職者、福祉
事業者に加え、転職マッチングを支援する公益財
団法人産業雇用安定センター神奈川事務所や、川
崎市福祉人材バンクの担当者らが一堂に会し、
「福祉を支える人材確保のあり方」「シニア人材
のやりがいづくりへの貢献」「多様性が広がる地
域社会で企業人材が活躍する意味あい」などの思
いや理想を共有化しました。フォーラムの中でも、
大手電機メーカーで製造管理に長年従事されてき
た方が、55歳で障がい者就労支援事業所に転職後、
80歳になった今でも、シイタケ栽培事業に科学的

<関連冊子のご案内>

これらをご覧になりたい方は、
下記の二次元コードからダウンロードできます。



編著：令和6年度社会福祉推進事業「企業等からの福祉現場への人材供給に関する調査研究事業」、2025年



視点を通り、福祉現場が人材の可能性を引き出す豊かな触媒
になっていくことを感じました。
1年間、「定年、その先へ」をお読み下さり、あ
りがとうございました。当冊子の「みんなの広場」
でいただく声が随分と励みになりました。これから
も生涯現役、地域社会への貢献をテーマに頑張って
参ります。

(完)

2) 産業雇用安定センター：全国ネットワークで「失業なき労働移動」を支援する専

長崎県波佐見町が 佐賀市「たすキュー金立」を視察 「多世代の活動参加」「居場所」互いに学び合う

1月28日、長崎県波佐見町の皆さんが、佐賀市金立地域の「たすキュー金立」を視察に訪れました。波佐見町からの参加者は、協議体委員、自治会役員、有償ボランティア活動者、居場所運営者、SC、行政など26名。

きっかけは、本誌昨年10月号掲載のたすキュー金立の記事。波佐見町では自治会単位の生活支援活動とともに、「協和（今日は）よんなっせ」（本誌2023年7月号掲載）など居場所活動が広がりを見せていますが、多世代が関わる地域づくりを目指す中、シニアのみならず多世代が関わり子どもたちが参加するたすキュー金立の生活支援活動を学ぼうと、視察を決めました。

一方、たすキュー金立は現状、拠点を持たずに活動していることから、互いに「多世代の活動参加」と「居場所」について情報と意見を交換し合う時間となりました。

編集部には、双方の関係者から「波佐見町でもPTAなどつながり、支え



合い活動や子どもたちとのふれあいを広げたい」「非常に盛り上がり、お互いに刺激をもらえたと思う」「和気あいあいとした雰囲気、同じように熱い気持ちを持った昔からの友人に会ったようだった」など喜びの声が届きました。



活動内容の学びはもちろん、つながりと友情が生まれる現場視察となりました。

(編集部)

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記(抄)**

**2026年度
実施事業・プロジェクトの紹介**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2026年2月1日～2月28日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

さわやかパートナー個人 (50件)

(都道府県別50音順)

北海道	北野内 智子	塩入 瑞恵
沢田 壮兵	千葉 徹	柴田 恭伸
丸藤 競	石毛 英夫	中井 郁子
渡部 保代	鳥山 美知子	仲田 明子
山形県	佐藤 悦子	野見山 國光
高梨 英子	鈴木 章雄	原島 敏子
福島県	増元 秀雄	松浦 隆史
小山 豊	森田 剛	宮沢 邦子
須貝 一男	弓削 規子	神奈川県
栃木県	東京 都	赤松 高明
菅野 忠雄	伊木 哲朗	長野県
群馬県	大石 芳野	水沢 芳夫
田中 恵子	小野島 一	岐阜県
埼玉県	木下 清	

河合 峯	三宅 修司	奈良県
静岡県	滋賀県	山出 哲史
朝田 充	谷 仙一郎	佐賀県
下郷 宰	松浦 正和	西田 京子
愛知県	京都府	大分県
加藤 さつき	小田 和夫	木ノ下 素信
関戸 進	小田 幸子	坂本 進
藤田 依子	大阪府	沖縄県
三重県	寺井 正治	上地 武昭
片山 幾代	渡辺 浩一	

さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

近畿労働金庫
一般財団法人住友生命福祉文化財団
株式会社榎屋

ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社
社会福祉法人隣の会

一般ご寄付 (3件)

(50音順)

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (1千万円)
匿名希望 (1万8360円)
匿名希望 (10万円)

地域助け合い基金ご寄付 (1件)

匿名希望 (5千円)



NEWS & にゅーす



いきがい・助け合い

フェスタ in 長崎

より身近な地域で開催

顔を合わせてみんなで熱い議論

2月25日(水)、初の地域開催による

「いきがい・助け合いフェスタ in 長崎」

を、長崎県と当財団の協働で開催しまし

た。長崎県内を中心に北は北海道から南

は沖縄まで、SCや協議体、助け合い実

践者、自治体職員、専門職等約150名

が長崎市内の会場に集まり、学び合いました。オンラインでも全国から220名の方々にご参加いただきました。

いきがい・助け合いフェスタ in 長崎

於・ベネックス長崎ブリックホール(長崎市)

プログラム

【午前の部】10～12時

開会あいさつ

新田 惇一氏 長崎県福祉保健部 部長

基調講演

清水 肇子 さわやか福祉財団 理事長

全体シンポジウム

「地域共生社会の実現 ～住民主体の

地域づくりをどう応援するか～」

●登壇者

江田 佳子氏 佐々町多世代包括支援セン

ター 参事(長崎県佐々町)

河田 珪子氏

支え合いのしくみづくりア

ドバイザー(新潟県新潟市)

田中 明美氏

奈良県福祉保険部 次長

中村 直輝氏

長崎県長寿社会課 課長

【進行】

鶴山 芳子

さわやか福祉財団常務理事

【午後の部】13時30分～16時
分科会

A分科会 居場所をどう広げていくか

●登壇者

上田 潤氏

一般社団法人ヒトナリ代表
理事(山梨県富士吉田市)

河田 珪子氏

支え合いのしくみづくりア
ドバイザー(新潟県新潟市)

里山 一郎氏

協和よんなっせ代表
(長崎県波佐見町)

山川 計司氏

協和よんなっせ事務局
(長崎県波佐見町)

【進行】

鶴山 芳子

さわやか福祉財団常務理事

B分科会 社会参加とネットワーク

●登壇者

相川 繁春氏

はてはらの里代表
(長崎県時津町)

大浦 むつみ氏

佐々町多世代包括支援セ
ンター(長崎県佐々町)

久保 宏記氏

佐々町多世代包括支援セ
ンター(長崎県佐々町)

末綱 智子氏

高平おばちゃんス代表
(大分県日出町)

堀 さおり氏

社会福祉法人日出町社会福祉
協議会 次長(大分県日出町)

中村保佑氏

労働者協同組合甲南げんき
村代表理事(兵庫県神戸市)

〔進行〕

清水肇子

さわやか福祉財団理事長

C分科会

離島など

人口減少地域の助け合い

●登壇者

北島淳朗氏

社会福祉法人ふるとと理事
長(長崎県西海市)

島名博美氏

有償ボランティアふあみり
ー代表(鹿児島県奄美市)

田中明美氏

奈良県福祉保険部次長
地域の応援隊和事務局長

西元和代氏

地域の応援隊和事務局長
(高知県津野町)

〔進行〕

山田薫氏

長崎県長寿社会課企画監

全体会 分科会のまとめ

○県の実情に合ったプログラム

これまで財団では「いきがい・助け合いサミット」を3000人規模で3回開催。2023年からは毎年、全国規模で「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」を開催してきました。その流れの中

で「県単位のような集まりやすいエリア

で地域開催をしようか」という話が

長崎県との間で持ち上がり、協働での開

催に至りました。テーマは「地域共生社

会に向けて住民主体の地域づくりをどう

広げていくか」。地域の実情に合ったプ

ログラムで関係者が顔を合わせて目的を

共有し、さまざまなアプローチ方法を学

び語り合う機会となりました。

長崎県は、長崎市などの都市部と、離

島や半島もある自然豊かな地域からなり、

21市町のうち20市町が海に面しています。

そんな地域の特性を生かした住民主体の

地域づくりを県がさまざまな施策で推進

してきました。SCや協議体がフォーラ

ムや勉強会などで地域に働きかけ、助け

合い活動が広がり始めています。財団と

県が約4か月にわたりオンラインで話し

合い、今後は「社会参加にも力を入れて

いきたい」「人口減少地域をテーマにし

たい」「共生施設の居場所も取り上げよ

う」と、このフェスタのプログラムをつ

くり上げてきました。

○モチベーションアップと、

生まれたたくさんの気つき

終了後、「楽しかった！ ありがとう

ございました」と、たくさんの参加者が

笑顔で声をかけてくださいました。アン

ケートでは、財団の清水肇子理事長の基

調講演の中で「メッセージに共感した

「助けてもらうことも社会参加の一つ、

という言葉がとても心に残った」とのコ

メントを多数、また、「この視点を持て

ると、可能性がぐんと広がると思いまし

た」との声もいただきました。A分科会

「居場所をどう広げていくか」の登壇者、

上田潤さんの発言「高齢者をケアの対象

ではなく、まちのプレーヤーに変えてい

く」に対する「この言葉は印象に残りま

した。今後の参考にできる発表でした」

という感想や、「80代の方がリーダーと

して頑張っている団体が多くあり、その

熱意や地域愛などを現役世代の人にも直

接伝える機会をつくっていきたい」など、

発想の転換や気づきがたくさん生まれる機会となった様子でした。

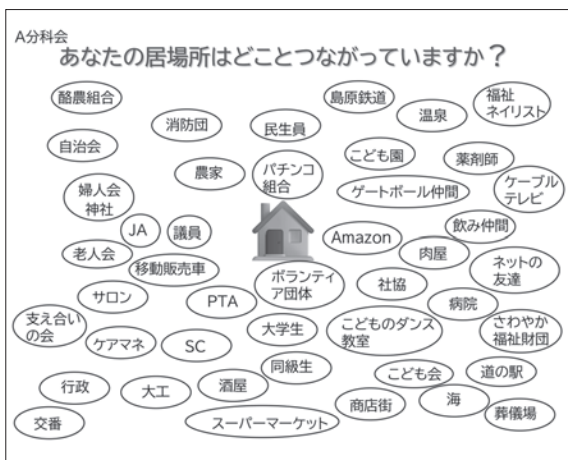
○「あなたの居場所」

「どことつながっていますか」

3つの分科会には、長崎県内と他県からの講師が登壇し、それぞれのテーマで多彩なアプローチを紹介しました。どの分科会も積極的に質問が出て、熱気に包まれました。

A分科会は「居場所をどう広げていくか」をテーマに、3地域の実践者から熱い思いとともに取り組みを紹介していただきました。グループワークでは「後継者の問題」「担い手不足」「男性の参加」「まち全体で広める方法を知りたい」「参加する人が固定化している」など参加者同士で悩みを出し合い、いろいろな方法を共有。登壇者にも直接質問し、回答やアドバイスをいただきました。

最後に、河田珪子さんの進行で全体ワークショップ「あなたの居場所はどことつながっていますか」を行ったところ、



A分科会の全体ワークショップでは、居場所とつながっている地域資源が多数あった

交ざり、長崎市近隣の東彼杵町や時津町などから協議体メンバーや助け合い実践者など住民の皆さんもたくさん参加され、各プログラムでも助け合い実践者や住民のSCが登壇して熱い思いを語ってくださいました。

アンケートには「住民の方の熱意が素敵でした」「どの自治体においても住民主体がすごいと感じました。モチベーションを上げたり、維持したりするためのSCなどの住民との関わり方もすごいと思います」「住民が主体となって活動されていることにとても共感しました」などの声が多数寄せられており、集まりやすいエリアでの開催は大変効果があったと感じます。

住民と同じ方向を向き共感し合う機会の重要性を実感できた今回のフェスタ。自地域での開催を希望する声もいただいております。来年度も他の地域で開催したいと考えています。

(鶴山 芳子)

「いきがい・助け合いフェスタ in 長崎」については、裏表紙もご覧ください。

1年間の研修を終えて

財団での学びやつながり 学校経営に生かしたい

東京都教育委員会 雛形 亮我

さわやか福祉財団に配属されて間も

なく、担当リーダーに同行して石川県輪島市を訪問させていただき、震災後の地域を訪れ、住民の方が安心して集まれる居場所の大切さを改めて感じました。住民同士が気軽に話せる場があることで心が支えられ、そこに寄り添う人の存在が地域を支えていることを学びました。一方で、医療や福祉の体制が震災前のように戻るには長い時間が必要であり、専門職の不足や受診の遅れなど、今も多くの課題が残っていることも知りました。

SCが実行委員を務め、都道府県と協力し企画・運営する情報交換会や研修会では、市町村の具体的な取り組み

や行政との連携の実態に触れ、対話を通じて支援の多様性や地域性の違いを実感できました。担い手発掘の工夫や住民主体の助け合い活動の広がり、行政・社協・事業委託先の連携のあり方、制度改正の捉え方など、多角的に学びを深める機会となりました。

また、神奈川県茅ヶ崎市のインクルーシブ遊園地では、インクルーシブバイクやバリアフリースポーツの取り組みを知り、障がいがあっても「やってみよう」という思いを実現する工夫に触れました。技術や発想の力で、誰もが同じように楽しめる環境をつくる姿勢は、特別支援教育にも大きなヒントを与えてくれるものでした。

地域食堂でのボランティアでは、子どもから大人まで多くの人が集まり、食事を通して自然に交流する温かい雰囲気を感じました。地域の中にこうした居場所があることが、子どもたちの安心にもつながると感じました。

共生常設の居場所や有償ボランティアを広く知っていただくために撮影でうかがった「ふれあい天童」では、認知症や障がいの有無にかかわらず、誰もが役割を持ち、自分らしく過ごせる環境が整っていました。頼まれる喜びや人とのつながりが、心の健康や介護予防につながることを実感し、地域づくりの本質を学ぶことができました。

財団での貴重な1年間は、学ぶことばかりで学校と地域が協力し多様な人々と関わりながら子どもたちを育てていくことの大切さを改めて確認することができました。これらの学びや横のつながりを学校経営に生かし、地域と日常的につながる学校づくりを進めていきたいと考えています。子どもたちが地域の中で多様な人と出会い、支え合う経験を積むことで、共生社会の担い手として成長できるよう、教育管理職として力を尽くしてまいります。1年間ありがとうございました。

さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します

ふれあい推進事業

フォーラムと勉強会を各地区で進めてきた西海市 西彼地区で2回の勉強会実施

■西海市(長崎県)

〔2月2日〕西海市は、2021年度から第2層エリア(旧町)ごとにフォーラムと勉強会を重ね、助け合い創出につなげてきた。25年度は、11月に西彼地区で住民フォーラムを開催し、その後同地区で4回の勉強会を企画して進めてきた。今回はその3回目で、同地

区以外からも含め住民60名ほどが参加した。

内容は、「助け合いの実践から学ぶ」とし、山形県天童市「NPO法人ふれあい天童」理事長の加藤由紀子氏が講演した。

最初に行政からフォーラム後の勉強会(1・2回目)の振り返りがあり、その後、

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

加藤氏が講演。「自分事」として助け合いを進めてきた歴史や、居場所と有償ボランティア(移動支援含む)等、助け合い活動のさまざまな効果などが思いたつぷりに語られ、参加者は引き込まれて熱心に聞いていた。その後、当財団が進行して質疑応答を行った。団体の運営をどうしているか、有償ボランティアでどのような活動メニューがあるのかなどの質問が出され、加藤氏が回答。なぜ有償かについては加藤氏



2月2日に行われた西海市の勉強会の様子

の説明に財団から補足して、全国の状況等を伝えた。

参加者アンケートには

「有償ボランティアという言葉をもつとみんなに知らせていきたい」「介護保険ではできないことがあり、日々考えていました。このような活動が必要になると感じるばかりです。すでに活動している地域等がたくさんあることに喜びを感じます」など前向きな意見が多数寄せられた。

【2月26日】4回目の勉強会が行われ、住民25名ほどが参加した。これまで助け合い創出に向けて「目指す地域像」や必要な助け合い活動について話し合い、実践者による講演から学び合ってきた。この日は目指す地域像の中で取り組みたい活動として、「居場所」「生活支援」「移動支援」から

グループごとに1つ選んでもらい、その実現に向けてできること、聞きたいことなどを出し合った。参加者はグループワークにも慣れできて、話し合いは活発に行われた。

冒頭、財団から「フォーラムから4回の勉強会を行って、皆さんが活発にグループワークを行う姿など、頼もしいと感じた。この後、何らか助け合いを始めたかと思っている人は？」とたずねると、5名ほどの参加者が手を挙げた。

その後、居場所の効果や移動支援について財団から情報提供を行った。

同市ではフォーラムと勉強会を重ね、助け合いの種をまき、芽が始めて、助

け合い活動も創出されてきた。26年度はフォーラムは行わず、何に取り組むか、行政や社協、第1層・第2層SC、第1層協議体など

「地域げんきフォーラム」開催

SCが発見したお宝「通いの場」を発信

■合志市（熊本県）

【2月7日】合志市社協が毎年開催する「地域げんきフォーラム」地域のお宝発表会・お裾分け会」が開催され、当財団も協力した。

同市では第9期介護保険事業計画において「すべての高齢者が住み慣れた地域でいきいきと暮らせるまち」を掲げており、その一環で「これからも〇〇したい」ことを地域の中で実現し、

で話し合っていく予定である。人口減少地域の助け合いの地域づくりに今後も注目していきたい。

（鶴山 芳子）

介護予防にもつなげることを推進している。第1層・第2層SCらは市内の「通いの場」の把握・創出・紹介を行い、地域のつながりづくり、生きがいづくりを応援している。そこで、1年間で把握した通いの場を紹介する機会として同フォーラムを開催した。通いの場をテーマとした同フォーラムは今年で3年目。地域

にある通いの場を、お宝と位置付け、活動を発表し、地域の通いの場マップ作成も行ってきた。

最初に行政が市の現状や制度について説明し、その後、第1層S C黒川敬士氏がフォーラムの趣旨やS Cの取り組みについて説明した。続くパネルディスカッションは5つの取り組みについて紹介があり、財団はファシリテーターとして質問をしながら内容を深めた。取り組みは、①サロン調査の報告(第2層S C岩切和子氏・山本州江氏)、②東須屋ひまわりサロン(ミニサロン)、③老人憩いの家体操教室、④元気の森公園「元氣市」、⑤健活サークル(ボランティア活動メ

シリーズ動画「心つながる」制作中!

さまざまな共生常設の居場所と有償ボランティアの実践を広く伝えるため、当財団では動画「心つながる」を制作することにしました。

その撮影のため、2月に財団の中村・雛形と撮影隊が山形県天童市の「NPO法人ふれあい天童」(理事長・加藤由紀子さん)を訪問。ふれあい天童は有償ボランティアと共生常設の居場所「の〜んびり茶の間」を30年以上運営し、地域の皆さんの大切な拠点となっています。

大きなカメラに最初は緊張していた居場所の皆さんも次第に慣れ、撮影は和やかな雰囲気の中で進みました。

有償ボランティアとして行っているグループホーム入居者の洗濯代行では、居場所の高齢者さんたちが協力して手際よく洗濯物をたたみ、仕分けを行って

いました。

そして、お当番さんが作った25人分の日替わりランチは、わいわい楽しくみんなで食べて、みんなで片付け。一人ひとりが役割を持って参加していました。病院への送迎や買い物支援にも同行させてもらい、「できることで助け合おう」というふれあい天童の取り組みをしっかりと収録することができました。

「心つながる」は、シリーズでお届けしてまいります。ぜひご注目ください!



ふれあい天童の撮影の様子。ランチ後、皆さんで片付け



合志市「地域げんきフォーラム」の様子

インの発表)。

財団からそれぞれの良い点とさまざまな居場所が広がることの必要性を伝え、「好きなこと、得意なこと

をしませんか。結果〇〇効果」として居場所のさまざまなあり方や効果を紹介した。また、よくある課題として「後継者をどうするか」「メンバーが固定化している」「男性の参加が少ない」などについての考え方や工夫などを事例や実践者の取り組みから紹介した。

5つの取り組みは、「通いの場を企画することをみんなで行っていたら自然と居場所になっていった」「リーダーを置かないでみんな自分で発的に運営する」「公園で食材販売をしていたところ、多世代のつながりが生まれ居場所になっていった」等々、意図して創出してないが、いろいろ

な人たちのつながりが生まれたり居心地の良い場になっている、結果的にさまざまな効果が生まれていることが紹介された。

これらの居場所はSCが地域に入りニーズを把握して見つけたものである。そういった取り組みを実践者から思いを持って発信することで参加者の心に響き、多様な活動の情報提供や参加につながり、実践者たちのモチベーションアップに

もつながっていくと感じる。第2層の庄村優佳SCらが発見した住民たちの取り組みとして、高齢者や認知症の人などによる手作り小物がフォーラム会場のロビーに展示され、「お裾分け」として希望者に配布されていた。作成者の似顔絵と特技も紹介され、「誰かに喜んでほしい」という気持ちを生かすアイデアも發揮されていた。

(鶴山 芳子)

「第2回第1層生活支援体制推進協議会及び第1回地域ケア推進会議」開催 体制整備事業と地域ケア会議の連携を目指す

■鶴ヶ島市(埼玉県)

〔2月13日〕鶴ヶ島市で「第2回第1層生活支援体制

推進協議会及び第1回地域ケア推進会議」が開催さ

れた。本会議は、第1層生活支援体制推進協議会と地域ケア推進会議の合同開催として実施され、約60名が参加した。

開会にあたり同協議会会長より、高齢者が住み慣れた地域で役割を持ち続け安心して暮らせるまちづくりの重要性と、今後一層の連携強化が進むことへの期待が述べられた。市健康長寿課からは、生活支援体制整備事業と地域ケア会議の連携について、両事業で抽出された課題には共通点多く、特に「地域で活動が行われているにもかかわらず十分に知られていない」「資源をつなぐ仕組みが重要」等の意見が共有された。本合同開催は、地域の具体

的な取り組みを知り、今後の地域づくりに生かすことを目的として行う、と説明があった。

続いて、以下の通りSC等の活動報告と地域活動の紹介が行われた。

1・第2層SCの報告

◇南部地域「いきいき」からは、筑波大学附属坂戸高等学校と連携した園芸教室が紹介された。団地における高齢者の孤立や外出機会の減少を背景に、2021年度から年2回、75歳以上の地域住民を対象に実施。今では高校生との世代間交流の場としても定着し、生徒にとっても農業知識や福祉の学びを实践する機会となり、地域と学校双方にとって

意義あるものとなっている。

◇関越地域「かんえつ」

からは、地域懇談会を重ねる中で見えてきた「人とのつながりの希薄化」「誰もが通える居場所の不足」という課題に対し、空き家を活用したコミュニティハウスの立ち上げが報告された。24年11月から子ども食堂を開始し、週1回の食事提供のほか、イベントや物資配布を実施している。さらに、オンラインカフェや中高生向けの無料学習支援も展開し、多世代が交わる拠点へと発展している。包括社協、企業、学校等がそれぞれの強みを生かして連携・運営。

◇北部地域「いちばんぼし」

からは、地域団体との連携強化が紹介された。地域住民団体と共催で防災や福祉をテーマとした集いを開催、自治会活動や地域資源を知る機会を創出した。主催者の「NPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会」は、草取りや買い物支援など身近な困り事を支援する活動を19年継続。近年はケアマネ等からの依頼も増加しており、相談窓口として役割を広げたいと話した。

2・市社協と

第1層SCの報告

(1)市社協より

「ここつなネット」の取り組み。近所同士で顔見知り

のチームをつくり、日常生活の中で無理のない見守りや気かけ合いを行う仕組み。



鶴ヶ島市「第2回第1層生活支援体制推進協議会及び第1回地域ケア推進会議」

若葉UR団地内のこつなネットは、避難行動支援者名簿をきっかけに5人程度のチームを結成し、現在は2チーム28人が参加。LINEで情報共有して、週1回の体操やサロン活動で安否確認を行い、長期欠席者には連絡を入れる。小学生も広報配布や交流に関わっている。

(2) 第1層SC

(市健康長寿課)より

介護予防ボランティア「つるフィット」の活動。

11年度よりボランティア「つるフィット」の養成を開始し、現在は36か所の通いの場で66名が活動。今年度立ち上がった「富士見ハイツ元気体操」では、3名のつるフィットが活動し、

参加者同士やボランティアとの交流も活発である。体操であれば男性も参加しやすいのでは、と声かけを行うほか、道で出会った認知症の人やその家族にも積極的に声をかけるなど、日常の中で意識的につながりづくりを進めている。

3・グループでの情報交換
「地域の活動紹介を受けての感想・良いと思ったこと・こんなこともできたらよいこと」をテーマにグルー

プワークを実施した。

4・講評

当財団より、SC等の活動報告および地域活動紹介への講評を行った。

今回の会議で、各地域で多様な実践が積み重ねられていることが共有された。今後も本合同会議を通じた情報共有と連携強化のさらなる推進が期待される。

(編集部)

生活支援体制整備アドバイザー報告会実施

■新潟県

【2月13日】新潟県はアドバイザー派遣事業を行っているが、本事業を活用した市町村の取り組みの成果の

共有・情報交換を通じて、今後の各市町村の地域づくりの参考としてもらうことを目的に、3年間支援を受

けた自治体が県内市町村の行政職員やＳＣ、協議体構成員等の関係者を対象に報告を行う「報告会」を実施している。この日、2025年度の報告会がオンラインで開催され、約60名が参加した。

行政からの事務連絡とアドバイザー派遣事業の状況報告等につき、取り組み報告が行われた。

妙高市は、第2層ＳＣも受託しているＮＰＯ法人が、法人の事業として生活支援や居場所（茶の間）づくり等にも取り組んでいる。その活動の中のニーズから移動支援を進める必要があり、アドバイザー派遣事業を活用しながら勉強会を重ね、買い物支援などの移動

支援も立ち上げている。そのプロセスにおけるアンケート調査や「やつてみよう」の一言から実践してみること、みんなで話し合うことの必要性などが具体的に紹介された。また、本事業のアドバイザーである河崎民子氏（ＮＰＯ法人全国移動サービスマネットワーク）から、全国のさまざまな助け合い移送の事例や最新情報等について、詳しく紹介があった。

その後、ブレイクアウトルームに分かれて参加者同士の情報交換が行われた。

テーマは、①他事業との連携で意識していること、取り組んでいること、②多様な主体との連携など、今後取り組んでいきたいこと、

③地域の困り事の把握方法について。この中からグループごとに選択し、30分程度情報を交換した。アドバイザーは各グループに入って話し合いを聞き、必要に応じて助言した。

全体では、いくつかのグループから発表が行われた。さまざまな悩みや手法、工夫についての情報交換の時間となった。

発表後、アドバイザーの河田珪子氏（有償ボランティア創出支援、共生常設型居場所創出支援）、当財団・鶴山（生活支援コーディネーター及び協議体活動支援、共生常設型居場所創出支援、有償ボランティア創出支援）、河崎氏（移動サービスマネット創出支援）、甲斐香

代子氏（多様な活動主体との連携支援）から全体を通じてのコメントをした。

アンケートでは、「妙高市の生活支援事業の取り組みを聞き、共感することが多かった。アンケート調査で地域住民のニーズを把握することが重要だと再認識できた」「第2層ＳＣだけが参加する気軽な交流会があるとよい。1市町村ではＳＣの数が限られているため、他市町村のＳＣと共に、具体的にとのような活動をしているのか意見交換する機会を設けてもらいたい」等の意見が挙がっていた。



（鶴山 芳子）

静岡県ブロック「第5回SC情報交換

課題や活動の共有とつながりづくり
〜本音で語ろう〜」開催

■静岡県

〔2月17日〕静岡県ブロックで「第5回SC情報交換〜本音で語ろう〜」様々な悩みを話し合い解決方法を見つけよう！」が開催され、行政担当者、SC、協議体構成員など25名が参加した。

主催した「さわやか静岡岡」は、さわやかインスタラクターの木下さち子氏と鈴木明与氏をはじめ、助け合い推進パートナーの下田市社協の第1層SC久保田勝氏、函南町の活動者・下郷幸氏、富士宮市「木工房いつでもゆめを」店長・稲

葉修氏、静岡市社協の第1・5層SC大澤祐介氏、袋井市南部地域包括支援センターの第2層SC三品陽子氏からなる。県社協の杉

亜佑美氏も加わり、意見交換しながら今回の情報交換会を企画し、当日の運営も担当。当財団も支援した。最初に県福祉長寿政策課

より、生活支援体制整備事業の概要について、県内の状況を含めて説明があった。基調講演は、山梨県南アルプス市元第1層SCの斉藤節子氏が「SCと協議体による助け合いの地域づく

り」と題して、同市のSCと協議体による住民主体の地域づくりの実践を紹介。寸劇を交えながら協議体の役割や必要性を分かりやすく伝える同市の動画も視聴した。

次に、「地域住民が主役になる『互助』の場としての地域食堂」と題してパートナーの久保田氏が発表。住民主体の地域食堂「すずきさんちでおひるごはん」と、地縁の復活を目指す「立野食堂」が紹介された。いずれも、市社協は資金や手続き、広報、相談等で伴走支援している。

続いて、「認知症の人との共生空間をデザインする」と題して、パートナーの稲葉氏が発表。若年性認知症

の当事者が週2回3時間の就労で賃金を得て、社会とつながる実感を大切にしていくことが報告された。

グループワークでは、参加者の各立場における地域づくりの課題と可能性が話し合われた。「コミュニケーションを埋めることが必要」「待つことやタイミン

グも大事」「良い活動は伝染する」等の意見があり、SCのフットワークや行政との連携の重要性が共有された。今年で5回目の開催となった情報交換会。今回も先進事例や実践報告、日頃抱えている課題や活動状況が共有され、参加者同士の間につながりづくりにもつながったようである。

3月には現場視察研修も予定しており、それぞれの地域での実践をさらに前進

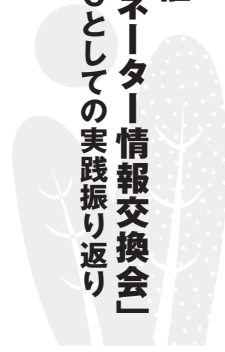
させるヒントとなることを期待したい。(上田 恵子)

山梨県ブロック主催 「生活支援コーディネーター情報交換会」 小さい単位の開催でＳＣとしての実践振り返り

■山梨県

〔2月18日〕山梨県ブロック主催「第3回 生活支援コーディネーター情報交換会」(峡南地区)が同県身延町で開催され、当財団はアドバイザーとして協力した。

この情報交換会は、県内のＳＣが集い、日頃の活動の悩みや課題等に関して話を聞き合う中で、1人で抱え込まない仲間づくりの場とすること、また、基本的



な知識の習得や課題への対応事例の共有を図るなど、ＳＣとしての実践を振り返る場とすることが目的。参加者は、峡南地域の南部町、身延町、市川三郷町、富士川町と、財団の助け合い推進パートナーなど県内他市町村のＳＣ、同県のさわやかインストラクターで、計16名。進行は、市川三郷町第1層・第2層ＳＣで助け合い推進パートナーの佐野

泰史氏が担当した。

目的や当日の流れの説明、参加者の自己紹介に続き、情報交換①「生活支援体制整備事業の現状」が行われ、峡南地域の4町と同県南アルプス市から報告があった。情報交換②「悩みややりがいなど」では、①の報告でざっくりばらんな悩みを出しやすい状況になり、取り組みがイベントだけで終わりになっていることなどさまざまな悩みが出された。また、じっくり取り組んでいくことの成果として、「行政の理解がようやく進んできた」「協議体での話し合いを重ねながら活動する中で、理解が進んだ」「住民の声から協議体が具体的な動きになってきた」など



山梨県「第3回 生活支援コーディネーター情報交換会」(峡南地区)の様子

のプラス面も共有できた。感想として「地域性が同じである峡南地域のＳＣ同士で話ができよかった」「行き詰まる中、情報交換できたことをこれからの活

動になげられると感じた」「公的サービスでは足りないことを協議体で広げていきたい」「住民とタッグを組むことが大切」「情報交換により、これからも個々に相談できる関係でいたい」等が挙がっていた。財団からは「県内の同じ立場の皆さんがざっくばらんに情報交換することは、たくさんの気づきを生み、前向きに取り組んでいこうという機運を高める大切な機会であることを実感した。主催の山梨県プロックの皆さんも実施してよかったと感じていると思う。この事業は正解が1つではない。人口減少で人材不足などさまざまな課題がある中、理解者を広げていくことが大

切ではないか。この機会につながった関係を明日からも生かして、一緒に良い山梨県の地域づくりを広げていきましょう」とコメント。

県主催では難しい小さい単位の情報交換会として機能していることが感じられた。
(鶴山 芳子)

「生活支援コーディネーター情報交換会」 2地区に分けて意見交換しやすい形で実施

■ 福井県

福井県主催の「令和7年度生活支援コーディネーター情報交換会」が開催された。この情報交換会は県が実施している初任者向け研修や全体研修とは違い、互いに取り組みについての情報交換を行うことで担当地区でのより効果的な取り組みのヒントを得ると同時に、近隣自治体のSCと相談し合えるネットワークを構築

していくことを目的としている。意見交換のしやすさを考慮し、多人数での開催を避けて嶺南地区と嶺北地区の2圏域で2日間に分けて開催。午後半日の集合型で、各市町の取り組み状況を参加者から報告してもらい、浮かび上がった課題についてグループワークで話し合うこととした。プログラムは2日間共通で以下の

通り。

- ① 県内の取組状況と次年度事業等の説明（県）
- ② 各市町からの取り組みの報告
- ③ 質疑応答（県、各市町からの報告に対する質問）
- ④ 「市町報告から見た課題の整理と対応」（当財団）
- ⑤ グループワーク① 市町報告課題からピックアップ（3*ステップに沿って）
- ⑥ グループワーク② 市町報告課題からピックアップ（活動立ち上げ）
- ⑦ まとめ

【2月18日・嶺南地区】

15名が参加し、2グループでグループワークを実施した。グループワーク①では「ニーズの把握」と「担い手の発掘」が選択され、「情



2月19日に開催された福井県嶺北地区の「生活支援コーディネーター情報交換会」

報発信にSNSを活用する」「発信方法、内容の工夫」等の意見が挙がった。

グループワーク②では「助け合いの移動支援」が選択され、「まずはニーズを知る場を持つことが大切」「フォーラムを開催し、住民に発信していく」等の意見が挙がっていた。

財団からは助け合いの移動支援について、特別な活動ではなく生活支援のメニューの一つであること、「住民の想いからの活動」で公共交通の補完ではないこと、住民のヤル気を育てた助け合い移送は、結果として、公共交通の補完機能を果たすことが期待できることなどを伝えた。

終了後アンケートでは

「他市町の取り組みや課題が聞けて参考になった」「SCの顔が見える研修で楽しかった」などの声が寄せられた。

【2月19日・嶺北地区】

オンラインを含め25名が参加し、5グループでグループワークを実施した。グループワーク①では「ニーズの把握」「協議体運用」「担い手の発掘」が選択され、意見として「行政主導になってしまいがち」「住民の想いと行政・SCの考えが交わりにくい」などが挙がった。

グループワーク②では「有償ボランティア」と「助け合いの移動支援」が選択され、「担い手のモチベーションを維持する工夫

が必要」「運転者の確保が課題」等が挙がった。

財団からは、住民に寄り添う視点で考えることが重要、利用低調な時期があってもすぐにやめず継続していくことが大切、などとコメントした。

終了後アンケートでは「地域に有償ボランティアがないので、他市の取り組みが参考になった」「生の声を拾うことを惜しまないようにしたい」「行政主体になりがちだったので、住民の主体性を引き出す工夫をしている取り組みを参考にしたい」などの声が寄せられた。

(高橋 望)



「地域支え合いフォーラム2026」開催 支え合い活動への住民の理解深める目的、寸劇披露も

■綾川町（香川県）

【2月28日】綾川町で「地域支え合いフォーラム2026」が開催された。参加者は関係機関から12名、一般住民96名と盛況であった。同町では、ボランティアに関わる住民を含め、広く一般の住民に地域の支え合い活動についての理解を深めることを目的に、毎年フォーラムが開催されている。今回は「『困つとんや』と言える町をめざして」というテーマで、地域における支え合い活動についての総論と各地の取り組みを紹介してほしいと当財団に依頼があり、鶴山が「自分

事」としての助け合い、地域の取り組みを応援してきて」と題して講演。「なぜ助け合いが必要か」を説明し、全国各地域における助け合いのある地域づくりの取り組み事例を紹介した。綾川町にはまだ有償ボランティア活動がないようで、高知県津野町の「地域の応援隊 和」の有償ボランティア活動の紹介は、「和」代表の西元和代氏が現地参加してくださったこともあり、包括や社協など仕掛ける側がつながる機会となった。

「助け合い体験ゲーム」は

参加者が16グループに分かれて行った。初めは「困っていること？ そんなのないな…」という参加者もいたが、実際にゲームが始まると、どの参加者も自分事として真剣に考えてカードをやり取りする姿が見られ、主催者の予想を上回る盛り上がりとなった。

また、今回のフォーラム限定の「つながる劇団」が「あなたは助けられる人？ 助ける人？」というテーマで寸劇を披露。笑いの中にも身近なシーンでの困り事解決を見せる工夫があった。介護

予防サポーター、公民館や社協、役場の職員、民生委員、町の電気店が本人役として登場するなど趣向が凝らされており、参加者は身近な人たちの演技に引き込まれ、会場の空気が一気に



「地域支え合いフォーラム2026」で披露された「つながる劇団」の寸劇の様子

和んだ。座学だけでなく、参加者同士が身振り手振りを交えた対話を通して「支え合い」について一緒に考える機会にしたいという主催者の願いが強く感じられるプログラムだった。

同町では町内を5地域に分け、4〜5名の社協のSCがチームとなって各地域



情報・調査事業

「かながわコミュニティカレッジ運営委員会」に出席

〔2月25日〕「令和7年度

第3回かながわコミュニティカレッジ運営委員会」に当財団が委員として出席した。

今回は、「1 令和7年度かながわコミュニティカレッジ運営業務報告及び評

入っている。今回の劇の内容も、日常的にSCが地域に入り、きめ細かく聞き取りをした住民の声を基に台本が作られていた。

今後、住民主体の地域助け合い活動が綾川町でも広がっていくことを期待したい。

(野尻 史子、鶴山 芳子)

価について」「2 令和8年度かながわコミュニティカレッジ運営業務企画提案第2次審査(総合評価)へ内容非公開」について協議を行った。

「1」は、受託事業者より今年度の講座実施状況、受

講者数、修了率、アンケート結果、フォローアップの取り組み等について説明があった。質疑では、各講座の修了率の高さが評価された一方、修了率がやや低い講座について質問があり、受託事業者からは「土曜午前開催で子育て世代の参加が多かったことが欠席増加の一因と考えられる。ただ、最終回アンケートでは高評価で、総合評価も高水準であったことから、満足度の高い講座であった」との回答があった。

次に、修了生インタビューの選定基準について財団より質問した。受託事業者からは今年度は「ボランティア団体の広報力を高めるための基礎講座」および

「地域でつながるあなたの第一歩。ウェルビーイングの始め方」の受講生(若年層と高齢層)の計3名に実施したとの説明があった。いずれも新規講座であり、受講後に自主グループが立ち上がるなど発展的な動きが見られた点を重視して選定したとのこと。

さらに、受講生フォローアップや自主グループ立ち上げ支援の方法について質問があった。受託事業者からは、講座終了後に声をかけるのではなく、講座実施中から団体と連携し、フォローアップ講座や再集合の機会を案内しているとの説明があった。また、希望者には講義室を一定期間無料で提供することを周知し、

立ち上げ手続きの説明を行うなど、具体的な支援をしているとのことだった。講座によっては、受講生同士が自主的に連絡網を作るなど、自然発生的なつながりも生まれていることが報告された。

総じて、講座実施のみならず、修了後の活動支援まで見据えた丁寧な運営が行われているとの評価がなされた。
(編集部)

事務所 だより

●長年、財団職員としてさわやかインストラクターの研修や連絡調整を担当してきたのは、今は財団のボランティアとなったHさん。先日、「インストラクターの皆さんを尊敬していたので、一緒に活動できてよかった」と振り返っていた。介護保険制度などない頃から「思い」で助け合い活動を実践してきたインストラクターさんも大勢いらっしゃる。地域活動の現場から大切なことを教えていただいている。

退職のお知らせ

(3月31日付)

■共生社会推進リーダー

岡野 貴代さん

岡野さんには、地域共生社会や生活支援体制整備事業の推進、情報・調査事業等に尽力していただきました。これまでの皆様のご支援に感謝申し上げます。

みんなで
新しいふれあい社会を
つくりませんか



さわやか福祉財団



公益財団法人

さわやか福祉財団

2026年度

※2026年3月18日現在の予定。

金額の数字は各事業の直接事業費予算額、1万円未満は省略しています。

実施事業・プロジェクトをご紹介します。

2026年度の実施事業・プロジェクトの予算が決定しました。

新年度も、地域共生社会の実現に向けて財団一同邁進いたします。

皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

ふれあい推進事業

2億1340万円

- ① 地域共生推進・助け合い創出プロジェクト
- ② 地域づくり生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト
- ③ ブロック等との協働戦略プロジェクト
- ④ ふれあいの居場所推進プロジェクト
- ⑤ 立ち上げ支援プロジェクト
- ⑥ 復興支援プロジェクト

社会参加推進事業

3809万円

- ① 社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

情報・調査事業

1億613万円

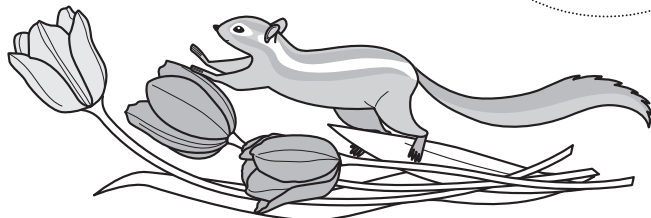
- ② 子ども育成支援プロジェクト
- ③ 子どもの未来応援プロジェクト
- ④ スポーツふれあいプロジェクト
- ⑤ 民間支援創出プロジェクト
- ① 情報誌発行プロジェクト
- ② 統括広報プロジェクト
- ③ 調査政策提言プロジェクト

収益事業

1836万円

- ① 不動産賃貸等事業

みんなの広場



投稿募集

皆様のご意見や情報をお待ちしています

掲載記事へのご感想、地域の助け合いや居場所の情報、社会参加の取り組みや、日頃気になっているテーマなど、ぜひお寄せください。

送付先

さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛。郵送の場合は、付属のハガキや投稿用紙をどうぞご利用ください。

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

認め合う場づくりや
学び合う機会を

匿名希望さん

熊本県

初めて『さあ、言おう』を読ませていただきましたが、感動いたしました。1月号「子どもと一緒に地域で輝こう」げんきカレー、さわやかスポーツ広場「バスケットで多世代交流」など面白く読みました。食養生、本物の食などを含めた、

貴重なご意見とあたたかい応援をありがとうございます。場づくりはこれからますます重要になりますので、情報収集と発信にさらに努めていきます！

互いに支え合う認め合う場づくりを相互に学び合う機会があるとなお良いのかな、さらにグンッ！と発展していくのではないかなと確信いたしました。
素晴らしい活動をしてください、本当にありがとうございます。

予告

今年も開催します！



いきがい・助け合い オンラインフェスタ2026

今年も地域づくりに関するさまざまな全国の事例やノウハウを
発信します。

「住み慣れた地域で一人ひとりが安心して自分らしく暮らせる地
域をどうつくっていくか」一緒に学び合い、語り合いませんか？

地域での住民の理解を広げるための勉強会や、専門職との連携
を考える勉強会などにも、ぜひこの機会をご活用ください！

「生活支援と移動支援の一体型ってどうやって立ち上げればいいのか？」
「常設の居場所の家賃や人はどうしていけばいいのか？」など、SC・協
議体、行政、社会福祉協議会、地域包括支援センター、住民の皆さんから
聞こえてくる声に応えて、プログラムを検討中です。

開催時期：2026年10月13日（火）
～10月22日（木）

開催方法：完全オンライン配信方式（アーカイブ配信あり）

プログラム：オープニングフォーラム、特別トーク
個別テーマによる「学ぼう編」「語ろう編」他

申込受付：2026年8月中旬開始

参加費：1,000円（税込）

※参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、
地域活動を応援します。

＜お問合せ＞ 電話：(03) 5470-7751

メール：festa@sawayakazaidan.or.jp（オンラインフェスタ担当）

◎上記の内容は、予定となります。詳細は6月頃、本誌や当財団ホームページで
お知らせします。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「春夢」

編集後記 ●好評の「生き方・自分流」は杉山真智子さん。苦難を乗り越え、施設を出た後の若者たちの自立を笑顔で支えています(P4~)。●「活動の現場から」は、千葉県東金市。住民の声を聞き、できることから無理せず、しかし着実に活動を進めています(P10~)。●本誌掲載の記事が視察につながり、訪問団体と受け入れ団体が学び合いました(P22「情報提供コラム」)。●財団初の企画として、県との協働で2月に開催した「いきがい・助け合いフェスタ in 長崎」のご報告を掲載しました(P25~「NEWS & にゅーす」・裏表紙)。

助け合いを
広げよう!



大橋 雄介

生前贈与寄付をしてくださった方が、亡くなられた。

人権活動に熱心に取り組み、

さまざまな団体に寄付もされていた。

しかし、亡くなられたことさえ、

ほとんど誰にも知らされていなかった。

孤独な晩年だったかもしれない。

桐沢洋教育福祉基金を通して、

故人とこどもたちをつなぎつけていきたい。



- NPO法人アスイク代表理事
アスイクは、東日本大震災の直後から活動をはじめ、こどもの権利を中心に、貧困、虐待、不登校、ヤングケアラーなど、さまざまな生きづらさに向き合っています。

たのきお 4月号

通巻392号 2026年4月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔泉

取材協力 七七舎

イラスト 福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

いきがい・助け合いフェスタ in 長崎

を開催しました

2月25日（水）、長崎県と当財団の協働で初の地域開催フェスタ「いきがい・助け合いフェスタ in 長崎」を開催しました。

身近な地域に集まることで多彩な事例から**気づき**と**共感**が広がる熱いフェスタとなりました。



清水肇子理事長の
基調講演



全体
シンポジウム



A 分科会



B 分科会



C 分科会

◎詳しい報告は、本文
25～27ページを
ご覧ください。